

 **Hiroshima Creative Cafe**

*the BOOK Vol.1*

WELCOME

“Hiroshima Creative Cafe”は、  
県内で新しいアイデアを持ってクリエイティブな活動を行っている人たちが自らの取組を発信し、  
“Cafe”に集う多様な人たちが交流する場です。  
世代や業種業態を超えたネットワークの構築やコラボレーション等による新たな活動の創出に向けて、  
広島県が月1回定期的に開催しています。  
広島県は、この取組により、チャレンジする人たちを後押しし、  
常に新しいプロジェクトやビジネスが生まれるクリエイティブな街の創造を目指します。



---

*From Director*

---

このプロジェクトの目的は、目標達成を生み、それに次ぐクリエイティブな発想を持った人々を多く育むこと。  
creativeとは何か？  
この1年敢々考えさせられました。

そして、高い志を持って登壇されるpresenterの皆さんや、  
これまで積み重ねてきた技術や智慧を惜みなく分け与えるsupporterの皆さん、  
更には関心を持ち、会場に足を運んでくださる沢山のaudienceの皆さんの  
熱心な表情や発言を見ていて分かったコトがあります。

creativeとは「一対一」目の前の1人を豊かにしたいという愛から生み出される「I-Dear」であるということ。

それを持った方々がこれだけ沢山いる広島は本当に「豊かな街」だと今、確信しております。

Hiroshima Creative Cafe ディレクター 松川友和

1 WELCOME

2 From Director

6 高山優子「世界から分数嫌いを撲滅!! 広島でカードゲーム『分数大好き』世界大会開催!!」

8 阪本美砂子「The Wonder 500・2016年の応募について」

10 坂口赤彦「第一本で世界へ飛ばたく! ~無から有を創る~」

12 鈴木いつか「ゼロの世界」

14 渡辺千恵「ママが教える『ひらがな』と『けいせん』これ100均の商品でぜんぶ作れちゃうんです!」

16 PocketPlan「広島に住んでいる若い人に、広島で活躍している若者向けサークルを知ってもらおう」

18 soikoiko! 石飛絵司「カイドブックに載ってない旅へ・地域の魅力を発見発信するガイドツアー」

20 Tech Chance! 入江智史「広島初・中高生向けプログラミングスクール」

22 petapeta\*\* やまぎささちえ「広島発の手形アートを世界の文化に」

24 NPO法人チャリティーサンタ広島支部 佐藤亮太 永江柚季「広島を真っ赤に染めるのは、サンタクロース!?!」

26 津福彩夏「子育てママ・パパの『やりたい』を応援する託児付サリフレッシュ空間 polyphony space「on. of 音」」

28 板倉一智「水産物の売りたい買いたいをシンプルに『Portable』で水産業の新しい常識を創る」

30 KAWARA 真本大生「KAWARA」の継続性と事業化に向けた可能性」

32 川本真智「新しいオリジナルブランドをつくり、地域を元気に~日中市に恋をしよう! 甘恋酒~」

34 倉田敬宏「田舎でライフスタイルの革命を=Inkavation=」

36 ハニープラス島友香「プラスハニープロジェクト! 地域×女性×養蜂の可能性」

38 ゆめのたね放送局広島スタジオ森川真之「ゆめのたね広島トークライブ! 『夢は、夢で磨かれる。』」

40 Summary

41 From Governor

42 Credit



## 畠山優子 / Yuko Hatakeyama

カードゲーム「分数大好き」を考案  
3年以内に世界大会をヒロシマで！

“世界”を口にするのは、大人になると少し気恥ずかしい。

だが「世界大会を開催し、世界一になりたい」と堂々と言い放ちたおやかに微笑む畠山さんを見ると、世界はそう遠くないのではないかと感じる。

畠山さんは学習塾を経営し指導する中で、子どもたちが分数でつまづくのを何度も見てきた。

分数嫌いの子どもたちが楽しみながら苦手意識を克服できるようにと、

カードゲーム「分数大好き」を考案、特許を取得。

分数が好きでなくても、分数を知らなくても、

ゲームを楽しみたい一心で自然と分数の考え方が身に付く。

もっと強くなりたいと、約分、通分の知識を知りたくなる。

カードの出し方を確率で考えるようになる。

順番を待つという社会性の習得も期待できる。

教え教えられる機会が生まれる、コミュニケーション的な要素も見逃せない。

教育現場に限らず、世代間交流や認知症対策など、幅広い分野から注目を集めている。

ゲームの開発中に UNO やポーカールールのことを調べ、世界大会があることを知った。

「私のカードゲームでも世界大会ができる！」という可能性にワクワクした。

「世界大会」という畠山さんの目標は、子どもたちに「自分たちが遊んでいるカードゲームは世界に繋がっている」という広い視野と、「世界一になれる」という夢と希望を与えている。

畠山さんは、海外の人と対戦したことがある。

片言の英語でルールを簡単に説明しただけで、十分に遊ぶことができた。

年齢、世代、国籍を超えて遊べるカードゲーム。

遊べば誰もが楽しいが、ファーストコンタクトをどう生み出すかが大きな課題だ。

一人では活動範囲に限界がある。

そこで今年 10 月から代理店販売員制度を始めた。

販売員を養成し、商品認知のスピードを加速させた。

全国規模のビジネスコンテストに出場し、全国での販路をつくる。

遊ぶ様子を動画にとり、海外へ配信する計画もある。

目標に向かって迷いなく進んでいるように見える畠山さんだが、自分のことを「不安がり」という。

「不安を払拭するためにむしゅらにやってきた」とこれまでを振り返る。

Hiroshima Creative Cafe の登壇も、事業の方向性や販路拡大に一人で悩む心細さからの挑戦だった。

登壇したところ、ゲストパネリストから高い評価を得て、のちの登壇者からも

「畠山さんのプレゼンを参考にしました」とうれしい声が寄せられた。

自分の力に気づくことができ、大きな自信となった。

世界大会は 3 年以内に開くことが目標。「世界に知られるヒロシマで」と目を輝かせる。

## 阪本美砂子 / Misako Sakamoto

### 広島伝統×デザイン コンセプトで地方創生

日本には世界にまだ知られていない優れた製品がたくさんある。  
広島にも、私たちがまだ知らない、気づいていないだけの優れた製品がきっとあるはずだ。  
阪本さんは、広島が誇るべき伝統工芸品にスポットライトを当て、新たな魅力を見出し世界に向けて発信している。

阪本さんは大阪で広告代理店を立ち上げ、プロデューサーとしてジャンルを問わず新商品開発とブランディングに取り組み、同時に日本の優秀な若手クリエイターの才能を最大限に発揮できるフィールドを構築してきた。  
そんな阪本さんが地元広島に戻ってきて始めたのが、広島ブランドになり得る企業の開拓と情報収集、  
広島のクリエイターとコラボレーションさせて生まれる新商品の開発とブランディングだ。  
日本が誇るべき産品を海外に広く伝えるプロジェクト「The Wonder 500™」を活用したブランド化を目指している。  
同プロジェクトでは、「日本固有のものづくり、サービスを支えている伝統的な価値観を組み合わせた革新性のあるもの」という評価基準で全国47都道府県から合計500商材を認定している。



阪本さんが手がけた、和テイストの雑貨「つむぎあふ」シリーズのヘアクリップも認定品だ。  
住宅に使われる畳やクロスなどの製造過程で生まれる端材を有効に再利用するリコマインズ製品で、製造は福祉施設に依頼。  
地域の福祉活動にもひと役買っている。  
地球環境と福祉活動を同時に実現。  
「かわいい!」と思わず手に取りたくなる、デザイン性の高さも魅力だ。

また、広島市にあるフラワーショップと組んで開発した「アイスフラワー」は、  
新鮮な生花を瞬間的にマイナス30℃に凍らせ、真空中乾燥させるフリーズドライフラワー。  
生花の最も美しいときをジェルに封じ込めることで、圧倒的に長い期間、その美しさを楽しむことができる。  
記念品、ブライダルでの需要を見込む。

広島で活動を開始して3年弱、広島での新たな出会いを引き寄せようと、Hiroshima Creative Cafeに登壇した。  
情報と、協力してくれる企業、クリエイターを探している。

「まだ出会えていない素敵な商材がたくさんあるはず。広島の高いデザイン性の高い商材を国内外に広めたい。  
自分が手がけた産品の海外での販路を拡大したい」。

海外で行われる物産展への出店に向けて準備を始めている。





## 坂口赤道 / Sekidou Sakaguchi

筆1本で学校へ、世界へ  
書で価値観の多様性を伝える

広島県産の熊野筆1本で、世界というフィールドに立つ人がある。  
「私が書く文字を通じて、もの見方、価値観の多様性を伝えたい」  
と話すのは、書家で詩人の坂口さんだ。

坂口さんは書道を始めて早い段階で書道の流派、会派を外れた。  
筆の二刀流や、まるで手品を見ているかのような「からくり文字」を書く。  
書道はこうあるべきという概念を根底からひっくり返し、独自の書道世界を開拓している。  
「書道にはルールが多い。それを否定はしませんが、守らないことが0点といえるだろうか。  
学校の先生たちがよいと思って教えていることが、かえって書道嫌いを増やしていないでしょうか」  
と坂口さん。

私たちが初めて字を書いたとき、書き順を気にしただろうか。  
初めて筆を手にしたとき、半紙いっぱい綺麗のように線を描いたことはないだろうか。  
ただ、楽しい、面白いという気持ちにワクワクしたはず。  
坂口さんの投げかけに、私たちが固定概念に知らず知らずのうちにとらわれていることに気づかされる。

例えば、コンクリートはとも固く形を変えることはできないし、人に投げるとケガをさせることもある。  
「もともとは歌らかいもので、その時点ではこねて遊ぶことができる。  
書道においても「心のどろんご遊び」が必要。

ルールを守っているか、字がまいかへたかではない  
まずは、楽しい、自分にもできそうと興味を持ってもらうことが大事。  
そのためには、一度は壊さないといけない固定概念がある。  
「学校の先生ではやりにくいはず。そんな時こそ私の出番。  
子どもたちに、あの先生はおかしいんじゃないの？と思われようなことを買って出たい」  
と、筆1本で教育現場へ向かう。

坂口さんの「だれでもまねできる書」が書道の間口を広げ、そして自分の感性に素直に堂々といえることの大切さを教えてくれる。

普段はアドバイザー側にまわることが多い坂口さんだが、Hiroshima Creative Cafeでは最初のプレゼンターを務めた。  
「いつもと違う立場に立つことで、人によってとらえ方が違うことや、伝え方の改善点も分かってよかった」。  
批判的な意見も貴重なアドバイスとして、自分の新しい一面として取り込む。

常に現場に立ち、「形よりも本質が大事」というメッセージを子どもたちを中心に広島から世界へとほほたく人に送り続けている。





## 船木いつか / Itsuka Funaki

ネイルアートより  
もっと手を清潔に

あと数年で消える職業にノミネートされた「ネイリスト」。

ネイルアートといえば、爪に色を塗り、柄を描いたリライストーンやラメなどで飾ったりと装飾的な側面が強く、生活とかけ離れたものという印象が強い。

しかし、「爪切り」はどうだろう？

船木さんはネイリストでありながら、「日常生活を送る上で、爪を飾る必要はない」と言う。「でも、手を清潔にしておくことは必要ではないだろうか」と提案している。

10代ごろ、世界的ネイルアーティスト(故トム・ホルコム氏)の

ハンドモデルにスカウトされたことが転機となり、自身もネイリストも目指した。

当時の広島ではネイルもSNSも盛んではない時代、ストリートミュージシャンのように道に座り、道行く人にネイルをアプローチし活動を知ってもらった。

現在はサロンワークにネイリスト育成の講師活動、異業種アーティストとのコラボレーション、イベント出演等全国で幅広く活動している。

そして2017年春、広島市西部のライフスタイル提案型大型商業施設「LECT」にネイルのお店を出店する。設計のSUPPOSE DESIGN OFFICE CO., Ltd.のご協力のもと、手と爪の持つ本来の機能を追求し、かつてない新しい空間づくりを進めた。誰でも行ききたいときにいつでも立ち寄れる、ネイルの相談窓口のような場所。雑貨店や化粧品店で専用グッズを買うのが一般的な今、ネイリストのアドバイスを受けながら道具や材料を選ぶことができる。子どもを対象にしたワークショップを実施し、ものづくり体験の機会を提供する。ネイルアートを通して新たなコミュニケーションを生み出す、これまでのネイルサロンとは違うまったく新しいカタチの空間だ。

ネイリスト歴14年という十分なキャリアを持つ船木さんにとって、普通のネイルサロンをつくる方がよほど楽でリスクも少ない。「そもそも消える職業とは価値がないから。価値=お客様のお役立ちができれば残れる」という使命感が船木さんを突き動かした。「事例のないことですから、正直、不安だらけでした。でも、Hiroshima Creative Cafeで自分の考えを皆さんの前で発表して覚悟が決まりました。私と同じように新しいことに挑戦する方々の姿を見て、私にもできる!と勇気ももらいました。ネイルアートの印象をがらりと変えていきたい。」

新たなプロジェクトに向かう、熱のこもった瞳が印象的だ。



渡辺千恵 / Chie Watanabe

発達障害児専門の学習指導  
手軽な100均商品で教材を手作り

保育士として9年、その後、結婚して5人の子どもを育て、幼児教室の講師としても働いてきた渡辺さん。

5人目のお子さんには重度の障害がある。

「障害のあるお子さんやその保護者の方と関わる中で、一人でも二人でも、そんな子どもたちの学習支援ができたら…」  
と思い、発達障害児専門の読み・書き・そろばん教室を始めた。

教材は手作りする。

市販の教材を使う予定だったが合うものがなく、「それなら作ろう!ゆくゆくはお母さんに手作りしてもらおう!」と、

材料が手に入りやすく安価なものを探し、100円ショップの商品を使うことを決めた。

手作りなら簡単に難易度を変更できるため、一人ひとりに合わせてカスタマイズできる。

「安価なので、お母さんが作ることを失敗しても、お子さんが使わなくても借しくない。

失敗したり成功したり、完成形にいたるまでのプロセスが大事ということを感じてほしい」と語る。

渡辺さんの目は子どもたちだけでなく、保護者にも向けられる。

「保護者の皆さんには、小学2年生が大事な時期であること、そして2年生までの力を基礎として、  
高校進学や社会に出る道につなげることができるとお伝えしています」。

不安を抱える母親を勇気づけている。

「Hiroshima Creative Cafeに登壇して、すごくたくさんの方が応援してくださり、自信になった。

自分自身でここまでできるか不安がありました。覚悟ができた」と振り返る。

力を貸してくれる人も現れた。

自分ができないことは、できる人が手を差し伸べてくれると分かった。

「登壇後は人生で一番動いた“激動”の日々、たくさんの人と出会うことができた。

専業主婦の渡辺に、仕事をする渡辺という違う顔ができた」と新しい自分にワクワクしている。

渡辺さんは、「発達障害のある子どもや保護者の方から多くのニーズがありながら、地域にはまだサポートができる場がない」と感じている。

今後は、不安を抱えるお母さんたちを対象としたお茶会や学習相談会といった集う場の提供、

インストラクターの養成、さらに就労支援へと思いは広がる。

「分度器はなぜ半円形なのでしょう? 角度を示す三角形に、違う形をした半円形の分度器を合わせることはとても難しい。  
だから、三角形の分度器を作りたいんです」。

やりたいことは止まらない。







## "PocketPlan" / ポケットプラン

広島のカフェ情報発信  
人と人をつなげ街を元気に

### 家と会社を往復するだけの毎日。

「学生時代の頃にサークルなどで充実した日々を送りたい!」  
と心の中で叫んでみても、どこに、誰に相談すればいいのかわからない。

そんな社会人に向けて、「社会人が参加できるサークルって世の中にたくさんあるんです!」と叫ぶグループがある。  
PocketPlanは、新社会人など主に20代、30代が参加できる広島のカフェや団体の情報を、  
ホームページやSNS、独自で発行するフリーペーパーなどを通して紹介している。

### PocketPlanを立ち上げて5年。

メンバーそれぞれが共通して感じていたことは、「仲間がほしくても募集する方法がわからない」、  
「サークルに入りたくてもどこに何があるのかわからない」ということ。  
入りたい人も入ってほしい人もいのに、両者のマッチングができていない現状が見えてきた。  
「サークルを紹介するツールをつくらう。」

メンバーは集めた情報をホームページやFacebook等で随時発信し、助成金を受けて季節ごとにフリーペーパーを発行。  
また、「サークルに入りたい」という人と「サークルに入ってほしい」という人とが、顔を合わせて話すことができるサークル合同説明会、  
サークルの運営者を集めたサークルを運営するための勉強会も開催した。  
サークルの活動の幅が広がるように、サークルとコラボレーションできる人や団体も探す。  
「新たなイベントを企画している人々に知ってもらえる機会をつくり、  
実績を重ねて企業に対しても安心感を持っていただけるようにしたいです」

今後は、サークルのエントリー数を増やすと同時に、サークルの質も高め、PocketPlanにエントリーする付加価値をより強調していく計画。  
PocketPlanの規模を数値化し、強みとして企業に打ち出していく。  
「サークル活動が継続・発展できるように、サークルを運営する人たちの相談場所としての機能も果たしたい。  
将来的には、この活動の運営システムを県外にも広めたい」と構想が広がる。

関わってくれる新規メンバーを募集 중이다。

「私たちの取組を通して広島のカフェ活動が活性化し、  
アクティブに活動する若者が増えていくことで広島のカフェの活性化につながっていくと考えています。  
PocketPlanをヒトとヒトがつながりを持つきっかけづくりとして活用してほしい。」

ホームページをのぞいてみると、これまでとは違う新しい明日が見えてくるはずだ。



## “sokoiko!” 石飛聡司 / Satoshi Ishitobi

ゆっくりだから見える広島がある  
地域の魅力を発見発信するガイドツアー

自転車を止めて周りを見渡すと、川に橋が架かり、向こうに海、山も見える。広島では見慣れたこの景色が、どうやらとても珍しいようだ。「驚きが多く魅力あふれる広島をもっとPRしたい」。それが、石飛さんが展開しているサイクリングガイドツアー「sokoiko!」の原点だ。

広島には、外国人観光客がとても多い。ゲストたちの旅の目的は何だろうか。原爆ドームや宮島、グルメにショッピング。グルメといっても、お好み焼きを食べたい人がいれば、作ってみたい人もいます。

sokoiko!では、ゲストの興味や関心に応じる「プライベートツアー」と、平和都市広島を学び感じるパッケージツアーの2つの基本ルートを用意し、ゲストのニーズに対応している。ガイドツアーは、週3日運行。ゲストハウスやホテル、観光案内書と連携して集客を図っている。いずれもガイドブックには掲載されていない街の魅力や広島生の空気を体感してもらうことが目的。地域の人との交流もサポートする。

風を感じながら見る何気ない風景、日常生活から垣間見える独特の文化や歴史、人の温もり、すべてがこのツアーのアクティビティとなっている。狭い路地や偶然発見したお店に立ち寄るなど、行きたいところへ行くことができるのも自転車の魅力。「地域資源を生かしたサービスの提供で、地域の活性化にもつなげたい」と石飛さんは話す。

体験型のツアーには、ワークショップに対応してくれる協力者が必要だ。石飛さんはロケハンに行って現地の人に話を聞き、現地のクラブマンを常に探す。あらゆる人と知り合い、広島の魅力を掘り起こし、新しい動きを察知してツアーに落とし込む。

Hiroshima Creative Cafeに参加したことで、人とつながるスピードが一気に早くなった。「どこにでも行きます!」。このネットワークのよさが石飛さんの最大の強み。新たな出会いによって、新たな視点も加わった。企業とのパッケージツアーの開発や、情報を随時受け付けるSNSを活用した窓口の準備に取り組み始めた。動いているからこそ、たどり着ける場所がある。そして「ゆっくりだから見えてくる広島がある」と石飛さんは言う。

たまには地元を観光してみよう。きっと、誰かに伝えたいくなる驚きに出会えるはずだ。



## “Tech Chance!” 入江智史 / Satoshi Irie

### 広島初のプログラミングスクール “好き”を形にする学びの場に

2009年、広島大学在学中に学生だけでつくる大学受験進学塾「広大研」を創業した入江さん。

それから7年、延べ200人以上の生徒を指導してきた。経験の中で、中学生が好きなおことに取り組み、はまると、大きなエネルギーを発揮、爆発的な成長を遂げるというのを目の当たりにしてきた。「スマホなどの普及でIT技術に興味を持つ中学生が増えてきた。好きが学びに変わる場を広島につくりたい」という夢が生まれた。

そして2016年5月、広島県初の中学生向けプログラミングスクール「Tech Chance! (テックチャンス)」を創業。プログラミング知識の基礎・理解にとどまるスクールが多い中、アプリ開発ができるようになるまでの高度なレベルを目指す。

ノウハウではなく実用性のある学びの提供によって、「ものづくりの楽しさを体感し、クリエイティブな力を養成することで、広島から世界に誇れる人材を輩出する地域環境をつくりたい」と話す。

好きなことだけをするのは、わがままで、生意気だと言われることもある。でも噛みついてこそできる失敗もある。

入江さんも勇気を発揮して覚悟を決め、チャレンジを続けてきた。それが実績となり、自信となった。

「好きなこととして成功する姿を見せ、子どもたちから憧れられる存在になりたい。Tech Chance!でも中学生が憧れる中学生を育てたい。

自分にもできると思える機会をつくりたいんです」。

目標は2020年までに5000人の中学生がプログラミング体験をすること。

それを実現するために、学校、地域、学習塾との連携、中学生が使いやすくなるアプリ開発を検討中だ。

「Tech Chance!の内容には自信がある。あとはいかに認知してもらうか」。

そのためにHiroshima Creative Cafeへの登壇や、実は苦手というメディア露出などにも積極的に取り組む。そこで気づいたことがある。

「大切なのは常にいろいろなことを吸収して成長しようとする姿勢。予備知識をフラットにしてもっと新しいビジネスにも挑戦したい」。

インタビューの最後に、リクエストにこたえて人気アニメキャラクターの物まねを披露してくれた。

立ち上がり、大きな声でこぶしを挙げた。

「当たり前!!!」。

一度決めたらやるしかない。

いざという時に思い切れる力、それが新しい道を切り拓く力になる。

## “petapeta\*\*” やまざき さちえ / Sachie Yamazaki

子どもの「今」をアート作品で残す  
広島発の手形アートを世界の文化に

ぎゅっと結ばれた赤ちゃんの手。

やがてものをつかみ、立つようになり、字を書き、大切な手を握り、自分の未来をたくり寄せる。成長の証ともいえる手形を、七五三で写真を撮るように残していけたらとても素敵ではないだろうか。

子育ては楽しいことばかりではない。

現在、手形アート作家として活動するやまざきさんも、出産・育児で大きなストレスを抱えていた一人。悩みや不安に押しつぶされそうになっていた時、子どもの手形足形をさまざまなモチーフに見立てた“手形アート”と出会った。「作品作りを通して、わが子への愛おしさを再確認できることに感動しました」とその魅力にはまり、独自で研究を始めた。

やまざきさんの作品は、白地に手形足形をレイアウトし、  
バステルカラーの模様やマスキングテープの装飾でインテリアとして楽しめる作品に仕上げる。  
小さな足形が熊に、親子の手形が象の親子や花に、足形がバイオリンに。  
子どもの「今」、成長の記録を、オシャレにカラフルなアートとして残す。  
「楽しいことばかりではない育児にちいさな彩り」がやまざきさんのコンセプトだ。

現在は、個人や大手子供服メーカーといった企業からのオーダーによる作品提供、  
イベント出店、保育園や小学校などに出向いて作り方を指導。  
これまで1000組以上の親子への作品提供及び制作指導を行っている。  
また、対面、スカイプ、テレビ電話を通じた「手形アートのやり方講座」を全国区で開催。  
乳幼児を持つ親子からの強い支持を受け、全国の親子に笑顔を届けている。  
著書「親子で楽しむ手形アート」(日本文芸社)も好評。  
その人気は海外へも広がり始めている。

やまざきさんの手形アート“petapeta\*\*”を指導できるアドバイザーは、国内外に150人を超えた。  
「育児中の女性の仕事の一つとして新たな雇用を生み、女性の自己実現や活躍につなげたい」と、  
講師を派遣する仕組みづくり、専用道具の開発にも取り組んでいる。

「手形アートは誰でも作ることができる身近で簡単なもの。  
手形アートをたくさんの方に知ってもらい、多くの人が写真を撮るように、子どもの成長を手形で残す文化を広めたい。  
そしてメイドインジャパンの文化として、広島から世界に発信したい。」

やまざきさんの手形アートが、育児の楽しみ方を広げ、女性の笑顔を生み出している。





“NPO法人チャリティーサンタ広島支部”

佐藤亮太 永江柚季 / Ryouta Satou Yuki Nagae

世界の子どもたちに夢と未来を  
広島から平和のメッセージを

クリスマスシーズンが近づくと、大人になった今でも心が自然と弾む。  
もしサンタクロースになれるとしたら…誰に、何を届けるだろうか。

すべての人が誰かのサンタクロースになれる社会を目指して、実際にサンタクロースになれる仕組みを用意して活動する団体がある。  
NPO法人「チャリティーサンタ」は、保護者からプレゼントとチャリティー金を預かり、  
クリスマス当日にサンタに扮したスタッフがプレゼントを届け、  
チャリティー金は世界中の困難な状況にある子どもたちの自立支援に当てている。

福島や熊本の子どもたちの支援にも取り組む。  
2008年に「世界中の子どもたちを笑顔にしたい」という想いで活動を開始し、現在の目標は「サンタのような人を育てること」。  
全国21都道府県28支部があり(2016年現在)、10,109人がサンタクロースになり、  
プレゼントを受け取った子どもたちは17,377人にもものぼる。

この活動に学生時代に参加した佐藤さんは、2014年に広島支部を開設。  
依頼家庭数は約50軒、80軒と年々増え、約100人のサンタボランティアが参加している。  
「サンタを待っている子ども」と「サンタになる大人・企業」をつなげ、たくさんの子どもたちに感動体験を届けている。

Hiroshima Creative Cafeに登場したのは、活動の信頼度を高め、  
企業研修やCSRなど多様な分野とのコラボレーションといった取組の可能性を広げるため。  
佐藤さんは、「この取組が広がることで、広島の安心やホスピタリティーが向上し、広島の魅力がより一層増していく」と考える。

また、世界に知られる“平和都市ヒロシマ”にある支部としての使命も忘れない。  
「広島の子どもを海外の支援先に連れていくなどして、子どもたち同士で平和についての思いを共有し、平和メッセージの発信、  
そしてその子どもたちが将来的に具体的なアクションを共に起こしていくような流れをつくりたい。  
“平和と保護”に力を入れ、広島にとって必要とされる活動に発展させたい」。

サンタクロースのような思いやりあふれる人を世の中に増やし、誰もが誰かの笑顔のために動ける社会に。

「年1回、クリスマスイブに子どもたちに“プレゼントと夢”を届けるだけでなく、  
世界中の困難な状況にある子どもたちに“支援と笑顔”を届けたら。  
大人が子どもを想う気持ちが集まれば世界は変わる、かもしれない」と  
と優しい笑顔を見せてくれた。



## ポリフォニースペース“on.off” 津福 彩夏 / Ayaka Tsubuku

子どもと一緒にいながら自分時間を  
広島発の託児付きリフレッシュ空間

子育てに休日はない。  
自分の時間が欲しいと思うこともきつとあるはず。  
そんなママパパにうれしいスペースが誕生した。  
子どもを遊ばせるオープンスペースではなく、親子カフェでも、一時預かり所でもない、  
託児付きのリフレッシュ空間だ。  
「ポリフォニースペース“on.off”」では、ママパパが気兼ねなくリラックスしたり趣味などに集中したりしている間、  
子どもたちは同じスペース内で保育士に見守られながら楽しく過ごすことができる。

立ち上げた津福さんは子育て中のママ。  
「いつかは自分で店を」という夢に向かって行動したくても子育てで動けないというジレンマを抱えていた。  
そんな時、東京に託児付きコワーキングスペースがあることを知る。  
これをヒントに、自身の子育ての経験を踏まえて、「広島で開くなら…」とスペースのイメージを膨らませていった。

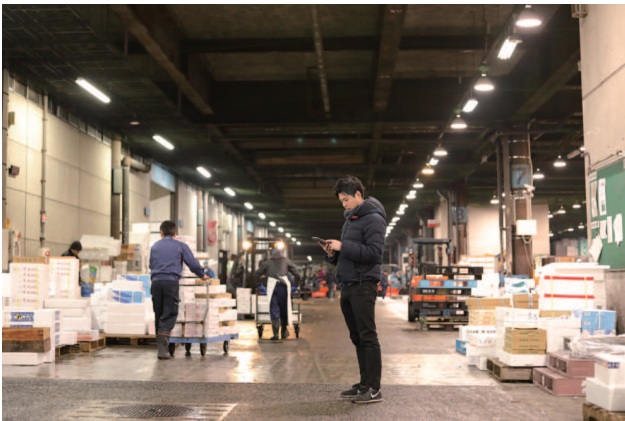


「子どもを託児所に預けるときに子どもに泣かれるとつらい。自分のリフレッシュのためとなおさら心苦しい。  
子どもと離れなくても、自分の時間が持てればリフレッシュになるのでは?」。  
その気づきが  
「利用する人たちが同じ空間に集まっているながらもそれぞれが独立した時間を保つことができる空間を」  
というコンセプトにつながった。

ポリフォニースペース“on.off”は4つのエリアに分かれている。  
1つは託児スペース内にある座卓席。子どもと同じ目線で作業ができる。  
その隣には、託児スペースを見ながら過ごせるテーブル席。  
作業台の上に子どもの手は届かない。  
さらにその隣のエリアは、子どもも大人も別々のスペースながら行き来が自由にでき、声も聞こえる。  
4つめは別々の部屋で作業に集中できるエリアだ。  
子どもたちの状態によって使い分けることができ、段階を踏んでママと離れる練習ができる。  
親子ともに気持ちよく利用でき、心地よく過ごせる。

Hiroshima Creative Cafeに登記して、ますます店のことが頭から離れなくなったという津福さん。  
「洗濯をしているときも、お風呂に入っているときも、ずっと。  
こんなあったら最高!とサービスを考えることが楽しくてたまらないです」と言う。

「とにかく子育てママに喜んでもらいたい。そして、ママだけでなくパパにも利用してほしい。  
パパが子どもと店に来て、ママは家事を済ませて自分の時間を楽しむ、そんな過ごし方が理想です!」。  
男性でも過ごしやすい空間作り、仕掛けを考え中。  
今後は、企業の福利厚生としての活用、イクボスの推進運動にも働きかけていく。



“株式会社ポータブル” 板倉一智 / *Kazutomo Itakura*

水産物の売りたい買いたいをシンプルに  
Portable (ポータブル) で中央と地方を結び水産業を再生する

松江の漁獲量日本一と言われている鳥取県岩美町。  
板倉さんは大学卒業までこの街で過ごした。  
曾祖父、祖父は漁師、多くの友人も漁師の仕事をしてきた。  
就職を機にこの街を出て、帰省するたびに港の船の数が減っている気がした。  
「地元の水産業を再生させるにはどうすればいいのか」。  
その発想から、水産業者間で日本各地の水産物の売買をインターネット上で行えるサービス「Portable (ポータブル)」が生まれた。

板倉さんは1年間、全国の漁港や市場を回ってその実情をヒアリングした。  
水揚げされた水産物は産地の市場へ運ばれ、産地の卸業者や仲卸業者が買い付けて飲食店やスーパーへ卸す。  
「産地の多くが人口減少の傾向にあり、販売量も減少しています。  
地方の産地の価格相場の停滞を改善しなければ水産業は衰退してしまつと確信した」。  
産地は売るところがないと言い、築地や中央市場では産地の魚を欲しがっている。  
需要と供給の情報が行き届いていないという、とてもシンプルな原因に気づいた。  
「このアナログな領域を、先進的なテクノロジーと創造でもっとシンプルに、便利にしよう」。

まずは、Portable (ポータブル) のサービスによって地方の生産地と中央の消費地を円滑に結び、  
そうすることで市場価格を適正価格に導き、販路の拡大も見込める。  
魚が安定して供給されることで、価格が均一化される。

今年に入って、水産業者の登録受付を開始した。  
試験的に30社ほどでスタートし、順次アップデートを行い、  
チャット機能や人工知能を活用し、一日ごとの予想価格を出す機能などを追加していく。  
水産業者はいつでもどこでも水産物の状況を把握でき、計画的な取引が可能だ。

「このシステムを水産業者にどどんとプレゼンしたい。そのためにも、いろんな人とのつながりを持ちたい」と、Hiroshima Creative Cafeで呼びかけた。  
登録者同士、ゲストバネリスト、オーディエンスなど、知りえなかった人とのつながりによって  
広島卸売市場を見学することができた。  
人との出会いによって一歩進んだ。

今、板倉さんは、まだ誰も通ったことがない道を、自身の行動力でぐいぐいと進んでいる。  
このスピード感はどこから生まれるのか、全力疾走の源は何か。  
答えはともシンプルだ。  
板倉さんは小さいころから魚を毎日食べている。  
大人になった今でも、寿司が焼肉と問われたら魚が食べられる寿司を選ぶ。  
とにかく魚好き、うまいから好き。  
シンプルに、魚が食べられなくなったら困るのだ。



## “KAWARA” 真本 大生 / Daiki Mamoto

### 広島らしさにフォーカス 熱量のある人がつながる場に

海外の人が持つ広島イメージといえば、宮島、お好み焼き、カブ、里山。

では、実際に広島に来て一番驚くものは？

「新幹線で広島から福山を通過するときに見える景色、広島県西条の赤瓦なんです」と真本さんは言う。

真本さんは就職を機に大阪から広島にやってきた。

「広島で何か面白いことがしたい」という思いから、

「西条の赤瓦のようなその土地ならではのらしさに注目し、ローカルの良さを発掘して世界に発信したい。」

またその人たちにスポットライトがあたる何かができる場をつくりたい」

とプラットフォーム・コミュニティー“KAWARA”を立ち上げた。

中心となる活動は、定期的な集まり「Meetup」の開催と企業への取材。

Meetupは2カ月の1回のペースで開催し、広島らしさにこだわる企業・経営者に登録してもらっている。

「個人ではつながりを持ってなくても、“KAWARA”という組織があるから注目していただける」と場の力を実感している。

広島大学が実施しているグローバルアントレプレナー育成促進事業（EDGEプログラム：文部科学省事業）との連携など、大学生も主体的に関わっている。

ただ、“KAWARA”は有志の集まり。

それぞれ本業は別にある。

Meetupの準備が思うように進まない。

「メンバーたちのつながりという狭い範囲の中で取材する人、登壇者を探しています。

人選が偏っていないか、テーマの一貫性や質を保てるのかという点に不安があります」。

当初は、面白い活動をしている人取材し、その中から登壇者を選出するという流れを計画していた。

サイトのアカウントはとったものの、取材はできていないしアップする記事はない。

動き出したものの前に進めない、見えない壁を見上げて果敢としていた。

Hiroshima Creative Cafeの登壇は、自分の思いと行動のギャップに向き合う機会となった。

場をつくる側としての覚悟が足りないことに気づき、自分を奮起させる機会になった。

「“KAWARA”をどうしたいのか」と真本さんが自問自答する中で改めて強くした思いがある。

「広島にこんなに面白い人がいることを、もっとたくさんの人に知ってほしい。」

そして分野や世代を超えて、何かやりたいという熱を持った人と人がつながっていく場でありたい。

“KAWARA”として向かうべき方向がはっきりと見えました」。

真本さんが新たに踏み出した一歩を多くの人が応援している。

## 川本真督 / Masayoshi Kawamoto

地域資源と人を掛け合わせて  
新たな魅力と生き方をつくる

広島市の西にある瀬戸内海に面した、廿日市市。  
巖島神社は有名でも、それ以外はあまり知られていない。

「廿日市市の魅力をもっとたくさんの人に知ってもらおう」と、廿日市市出身の川本さんが新しい地域ブランドとして「甘恋酒」プロジェクトを立ち上げた。廿日市市にある中国醸造の日本酒「弥山」をベースに「縁結びのお酒」というコンセプトを加えて販売。廿日市市の伝統工芸である「宮島ろくろ」の特製酒器とのセットとした。このプロジェクトは、地元の若手を中心としたデザイナー・モデル・写真家・動画クリエイター・アーティストたちの協力を得て実現させた。

川本さんは東京大学の大学院に進んでウイルスを研究し、大手企業での勤務を経て、「自分らしい人生」を求めて起業。しかし、起業1年目は売上上がらなかった。起業したのにやられる仕事、つまらない、しかも収入は不安定。「なんでこの仕事をしているんだらう?と落ち込み引きこもった...といつも休んだのはたったの1日。『何か純粋に楽しいことをやろう!フェスがしたい!』と立ち上がり、地元廿日市市で野外フェス“縁祭”を企画、開催した。目的は、地元の個人事業者、これから何かを始めたいと思っている人が集まり、商品や作品を持ち寄り交流すること。このイベントでつながった人たちのために何かができるかと考えたとき、出した答えは川本さんがこれまでやってきた「ブランディング」だった。

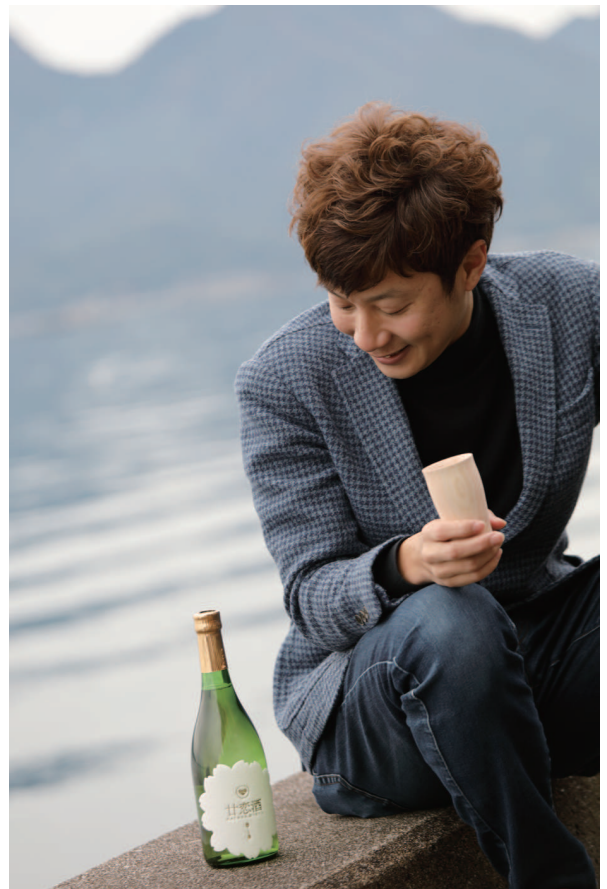
それからは、人やものの魅力を最大限に引き出して、広報する仕事に注力。甘恋酒のように法人や個人事業主の商品やサービスのブランド価値の向上、イメージアップにつなげるブランディングに取り組み、新たな地域文化を創り出している。人との出会い、そこで生まれるアイデアが川本さんのアクションにつながっている。

ブランディングの仕事をする中で、プロフェッショナルな商品やサービスのプロモーションはできても、それを一緒になって盛り上げてくれる人がいないという問題点に気づいた。「地域の魅力・地域の人材を応援し合える、コミュニティをつくりたい」。そんな思いから、拠点となる起業家サロンを広島市内に近々オープンさせる予定だ。

廿日市市を元気にするプロジェクトは1つ実現できた。  
Hiroshima Creative Cafeで「何かを始めたい」というエネルギーを持つ人とつながることができた。

「これを軸に、広島県全域、そして全国に活動を展開させていきたい」。

地域やジャンルといった枠にとらわれない、自由な「地域ブランドプロデューサー」として新しい生き方を見せてくれている。







倉田敏宏 / Toshihiro Kurata

90年の古民家でイノベーション  
多様な生き方を実現できる場から、豊かな人生を

福山市沼隈町にある築90年の古民家の改装を始める「tachimachi工房」。  
ゲストハウスとして、コワーキングスペースとして、気に入ったら住むこともできる場を…。  
倉田さんは築90年の古民家をソーシャルハウスと名付け、  
「田舎でイノベーション (Inakavation) を起こしていこう!」と宿のオープンをはじめ、  
耕作放棄地の再生のマネジメント、創業コミュニティ形成のための企画、運営などの準備を進めている。  
既に耕作放棄地の再生に必要な費用をクラウドファンディングで調達した。

倉田さんは東京で1年間、ベンチャー企業に勤めていた。  
そこは、社会課題を旅行という手段を使って解決していくというユニークな取組をする会社。  
「皆本気で社会を変えようとしていた。本気で事業に取り組んでいました」。  
しかしあまりにも忙しく、  
「こんな素晴らしいミッションを持った人がもしも疲れて倒れたら、社会は前進できなくなり、  
良い変化を起こすことは難しいのではないかと」と未来への期待とともに危機感を感じたと言う。

そこで地元である福山市沼隈町に戻り、田舎という資源を使ってミッションを持つ人が休める場を作っていくために「tachimachi工房」を創業した。  
「社会の変革者となり得る人たちが田舎に集い、団契を通してオープンイノベーションを起こしていく環境整備を進めています。彼らが存分に仕事に打ち込むことができ、かつ、存分に休むことができる、人生を豊かにする選択肢を増やすことを目指しています」。

Hiroshima Creative Cafeの登場は、このプロジェクトを客観視する機会になった。  
田舎の資源を本当に理解できているのか、それを十分に発揮できているのか、既存のものを活かすだけではなく新規のものを加えていかなければ足りないとも感じた。  
「新しいものを作っていけば人の動きが生まれる。コミュニケーションが増えると情報も増える」と早速動き始めた。このプロジェクトに共感した大阪のバリスタは、隣の尾道市向島町へコーヒーを提供する拠点をオープンさせるため移住してくれた。「tachimachi工房は単なる場所ではなく、地域におけるメディアとしての役割を担い、旅人(お客様)と田舎を接続する橋としての機能を持たせたい。お客様や地域の方と一緒に新しいコンテンツを増やしていきたい」と話す。

Cafeをつくる、田舎暮らしや沼隈町を楽しむための体験プログラムを整備する、そして法人との契約も積極的に検討中。アーティストらの制作活動に、会社の支社として活用するといった新しい働き方の提案も含む。ここから発信する情報の価値を高め、有料サイトを運営するといった計画も。そんな取組が、早くも東京のフリーランスやIT企業からの関心を集めている。

「様々な地域で多様なライフスタイルを実現できる環境を整備したい。人が来れば来るほど、場の価値が高まっていく。それが、tachimachi工房のミッションです」。

明日への期待が高まる拠点がまもなく完成する。







## "ハニー・プラス" 島友香 / Yuka Shima

街中"はちみつ"プロジェクト  
"おいしい"は幸せの力になる

38歳を"ミツバチ"と添めるとは驚いた。

「このネタを使うのは今年だけ!」と養蜂を始めた人がある。  
「農業や環境保全活動の分野の中でも女性が主体でやるのにピッタリ」と2016年、  
38歳の島さんは、街の小規模養蜂家として「ハニー・プラス」を創業した。

「農で社会を豊かにしたい」との思いから、大学で農業経済を学んだ。

「農業の問題は、生産方法ではなく仕組みにあるのではないか」と感じ、

ビジネスの仕組みを学ぶために東京商工会議所に就職。

その後、日本各地で農業先進事例の武者修行を経験。

家族で直売所を運営するも、収穫高の変動や廃業ロスに苦戦した。

「楽しくもつらい、食べていけない農業はダメだ」と出身地の広島に戻り、広島市内で養蜂場をスタートした。

島さんが小規模養蜂を選んだ理由はたくさんある。

小資本で始められる、広い土地を持たなくてよい、労働時間が少なくてすむので副業としてできる。

また、はちみつには消費期限がほぼなく、料理に使ったり、美容パックにも使える。

副産物の蜜蝋、ローヤルゼリー、プロポリス…ほぼ捨てるところがない。

そして、「私たちが公園や庭で花を育てれば、ミツバチはその花から蜜を集める。

ハニー・プラスでは地元産の非加熱はちみつを手しほりで瓶詰めします。

その年その季節の花々の香りを閉じ込めたタイムカプセルのようなもの。」

採れたはちみつに地域性が現れる点も面白い。

全国のイベントにも出かけて販売しているが、

「自分に近い場所で育った食べ物は体になじんで、よりおいしいのじゃないかな」と

地元広島産のはちみつのファンが広島に多いことをうれしそうに語る。

現在、住民参加型の小規模養蜂の仕組みづくりに取り組んでいる。

個人や店、学校や地域に巣箱のオーナーになってもらい、管理を代行し、

資材のあっせんや余剰はちみつを買い上げて販売するなどのサポートを行う考え。

「養蜂のフランチャイズ化も進めたい」と、システムづくりでの専門的なアドバイスを求めてHiroshima Creative Cafelに登壇した。

近々の目標は「5年後にミードはちみつ酒をつくる」こと。

欧米では地酒として流通し、日本でも事例がある。

また、はちみつはハナムーンの語源であることから、プライダルにも参入したいと考える。

「〇〇+ハニー商品っているいろいろできると思う。

はちみつの用途を知ってもらい、独自の発想ではちみつの新たな役割をつくりたい。」

住民が参加することができるはちみつ、楽しいはちみつを目指して、島さんは今日も元気な笑い声とはちみつを届けている。

“ゆめのたね放送局 広島スタジオ” 森川寛之 / Hiroyuki Morikawa

大人が夢を語るトークライブ  
子どもに夢を、夢は夢で磨く!

「将来の夢がない」と言う子どもが増えていると感じる。

それはなぜか。

「大人が夢を語らないから子どもも夢を持ってない。周りの大人が、夢やチャレンジを語り、応援し合い、共有する。

夢いっぱい大人を増やすことで、将来、未来にワクワクする子どもたちを増やしたい。」

ある男性の思いが、大阪で誕生したインターネットラジオ「ゆめのたね放送局」の広島での放送へとつながり、夢を届ける活動をさらに拡大させている。

広島スタジオを運営する森川さんは、普段は広島市内の企業で経理や人事を担当するサラリーマン。

運営にはボランティアで携わる。

以前は極度のアトピーを患い、27歳の時の夢は「マフラーをまくこと」。

ある人にその夢を全否定され、夢を語ることをやめた。

その後、森川さんの子どももアトピーを患い、子どもへの治療法を求めて5年間駆けずり回り、なんとか症状を克服できた。

「その時に初めて、子どもがサッカーをしたいと夢を語りました。体のトラブルを克服したら夢も持てるんだと。

夢に向かえず立ち止まっている自分にハッとしました。」

そんな時、友人から教えてもらい、インターネットラジオ番組「ゆめのたね」を知る。

ラジオを聞くと、FMなのに音楽を流さず、有名ではない人に夢を語らせていた。

リスナーが人を紹介したり、場所を提供したり、援助したり。

「ぜひ広島で」と番組に打診したのをきっかけに、森川さんが2013年、広島から「ゆめのたね」を発信することになった。

2015年に広島スタジオが完成。

2017年の今ではパーソナリティーは50人になる。

1つのラジオの番組が、多くの人の夢とともに広島など全国に6拠点を持つ放送局となった。

インターネットラジオで夢を届けつつも、「その場の空気、本人の熱を感じる事が大事」

と森川さんは「リアルな声」を届けることにもこだわっている。

2013年1月、夢を語るイベントを友人と合計6人、カフェでスタートさせた。

今や40回を超え、毎回30人を超える参加がある。

その場にいる約30人全員が自分を語り、感想を語り、他人の気づきを聞く。

その場で発信したことを後日、FacebookなどのSNSに投稿してもらいコメントをもらう。

発信する楽しさを知ると、家族へ、隣の人へとどんどん発信したくなる。

活動が盛り上がる一方で、森川さんは共感する人だけが集まる場に偏りが生まれることを心配する。

「この活動が一般的にどう映るのか、外の声を聴きたい」とHiroshima Creative Cafe!に登壇した。

同時に、夢を語る価値を発信した。

今後の目標はトークライブを教育現場で開催すること。

「夢を語る場を学校教育の現場にも拡充させたい。」

2023年までに、全国の学校で学校行事に盛り込んでいただけるように働きかけたい」と熱く語る。



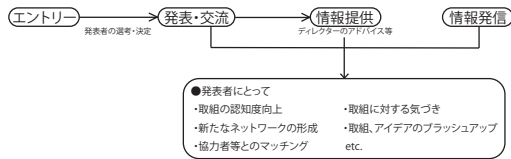
## Hiroshima Creative Cafe(HCC) 概要

### ●開催概要(平成28年度実績:vol.1～vol.7)

開催日時	原則として、毎月第3金曜日 19:00～21:00
会場	port. inc(ポートインク)
定員	約40名(発表者2～3名、ゲストパネリスト3～4名、オーディエンス約30名)
対象	発表者:主として広島で新たな取組を行っている方を公募により選定しています ゲストパネリスト:広島を拠点に活躍されている多様な分野のスペシャリストをお迎えしています オーディエンス:どなたでも観覧いただけます(随時募集しています、観覧は無料です)
プログラム	1. 発表者によるプレゼンテーション 2. 発表者とゲストパネリストとのトークセッション 3. 発表者、ゲストパネリスト、オーディエンスによる交流
ディレクター	松川友和(Cocoro-to production CEO)
主催	広島県

### ●情報発信等

- Cafeで発表された取組を専用サイト、Facebook、「Hiroshima Creative Cafe the Book」などで発信
- ディレクターによる発表後の個別相談を実施



### ●随時、発表者を募集しています

- 次のような取組を行っている方のエントリーをお待ちしています
- 新たに起業を予定している又は起業して活動されている人
- 街の課題解決や魅力づくりに取り組んでいる人
- アート、デザイン、ITなどで制作活動を行いながら独自の取組を行っている人
- 自ら考えたアイデアの実現に向けて取組を行っている人
- etc.

※エントリーはごちらから ▼HCCホームページ・サイドメニュー「発表者エントリー」をご覧ください。

### ●情報をお寄せ下さい

- 「Hiroshima Creative Cafe the Book」に掲載している、発表者の取組にご協力頂ける方からご連絡をお待ちしています。
- 情報発信に協力します!
- コラボした企画を提案できます!
- 人材紹介や、企業に情報提供できます!
- サポートできることがあります!
- etc.

### ●上記に関するご連絡先

広島県地域政策局都市圏魅力づくり推進課 TEL:082-513-2566 Mail: chitoshiken@pref.hiroshima.lg.jp



From Governor

クリエイティブとは、一言で言うところ、カッコいいということです。

カッコいいは、先端的、人がまねたいということであり、また、新しい価値観を生んでいくことだと思います。広島が、これらが絶えず生まれ、世界の中で「最高にかっこいい!」と言われる場所になればいいと思っています。クリエイティブを生むためには、今の時代においては、個々が深く追求するとともに、いろいろな考えを持った人が集まって化学反応を起こすことが重要です。Hiroshima Creative Cafeがそのきっかけとなる場、ネットワークづくりの場になり、多様なものがミックスされて熱量が上がっていく場になることを目指して、これからも取り組んでいきます。

湯崎英彦

## HCC Hiroshima Creative Cafe

### -Presenters-

- ・高山優子 “世界から分數嫌いを撲滅!!広島でカードゲーム「分數大好き」世界大会開催!”
- ・阪本美砂子 “The Wonder 500・2016年の応募について”
- ・坂口赤道 “書一本で世界へ羽ばたく〜無から有を創る〜”
- ・船木いつか “ネイルの世界”
- ・渡辺千恋 “ママが教える「ひらがな」と「けいせん」これ100均の商品でゼーンぶ作れちゃうんです!”
- ・PocketPlan “広島に住んでいる若い人は、広島で活躍している若者向けサークルを知ってもらおう”
- ・sokoiko!石飛聡司 “ガイドブックに載っていない旅へ・地域の魅力を発見発信するガイドツアー”
- ・Tech Chance!入江智史 “広島初・中高生向けプログラミングスクール”
- ・petapeta\*\*やまざきさちえ “広島発の手形アートを世界の文化に!”
- ・NPO法人チャリティーサンタ広島支部 佐藤亮太 永江柚季 “広島を真っ赤に染めるのは、サンタクロース!”
- ・津福彩夏 “子育てママ・パパの「やりたい」を応援する託児付きフレッシュ空間 polyphony space Ton.off!”
- ・板倉一智 “水産物の売りたい買いたいをシンプルに「Portable」で水産業の新しい常識を創る”
- ・KAWARA真本大生 “「KAWARA」の継続性と事業化に向けた可能性”
- ・川本真喜 “新しいオリジナルブランドをつくり、地域を元気に〜廿日市に恋をしよう!廿恋酒〜”
- ・倉田敬宗 “田舎でライフスタイルの革命を=Inakavation=”
- ・ハニープラス島友香 “「プラスハニープロジェクト」地域×女性×農縁の可能性”
- ・ゆめのたね放送局広島スタジオ森川寛之 “ゆめのたね広島トークライブ!!夢は、夢で磨かれる!”

### -Supporters-

- ・若狭 利度 (株式会社わかさ屋呉服店 代表取締役)
- ・山下江 (山下江法律事務所 代表/弁護士)
- ・渡 則男 (NSウエスト株式会社 代表取締役社長)
- ・竹本 新 (株式会社ヒロック 代表取締役社長)
- ・松田 弘 (株式会社部屋店 代表取締役会長)
- ・神原 謙治 (ケーシーエンタープライズ有限公司 取締役)
- ・山本 修平 (株式会社バース企画 取締役)
- ・倉 喜美夫 (一般社団法人ボトムアップバーンズ協会 代表理事)
- ・佐藤 亮太 (ひと・まちデザインオフィス 代表)
- ・塚本 知臣 (株式会社越前屋 営業部長)
- ・坂口 赤道 (有限会社アルファトップ 書家/詩人)
- ・窪田 崇 (ワイラブ広島プロジェクト 代表理事)
- ・三藤 和之 (中国新聞社広告局 担当局長)
- ・ゴトウ イズミ (音楽喫茶アルカン座・十日市アパート・ふらんす座 代表)
- ・石内 良道 (広島市中央部商店街振興組合連合会 事務局長/NPO法人セトラひろしま 副理事長)
- ・豊崎 光邦 (一般社団法人ITADAKI 代表理事)
- ・東 和空 (太光寺一山修行院 住職)
- ・谷村 秀格 (書家/俳人)
- ・鈴木 榮子 (芸術学博士/花道家 小原流いけばな一級家元教授)
- ・高掛 智朗 (瀬戸内障子家リゾートCiela 代表)

### Hiroshima Creative Cafe the Book Vol.1

#### -ディレクター-

松川 友和 (Cocoro-to Production CEO)

#### -主催-

広島県地域政策局都市魅力づくり推進課  
 酒井 賢児  
 木谷 亜沙美  
 別役 梨紗

#### -運営・スタッフ-

株式会社 ハノナ

※本事業は株式会社「ハノナ」が広島県から委託して行っている事業です

高富 文俊

上村 卓也

土居 光

小松 雅子

岡林 加恵

岡田 亜紀

池 美咲 (Cocoro-to Production)

#### -会場-

part, Inc (ポートインク)

#### -印刷-

株式会社 沼田総合印刷

#### -製本-

有限会社 石井製本所

#### -ライティング-

河野 孝文 (株式会社アドクリエイト)

梶津 利江 (文と編集)

#### -撮影・編集・デザイン-

K&M FILM

牧瀬 和人

亀谷 透